

平和に関する単元による読書指導の研究

藤井 恭子

一、はじめに

本校は今年で創立十周年を迎える新設校である。鹿児島市内で最も新しい新興住宅地内に位置し、生徒たちはおおむね都会的で澁刺としており、学力も高い。特に言語事項については、標準学力検査において全国平均を大きく上回る結果を残している。一方で、都会的な生活の中で実体験に乏しい傾向が見られ、日ごろの生活における課題解決能力や体験的活動への意欲は低い。国語学習においては長文を読むことや、長い字数で要旨などをまとめる活動への苦手意識を抱く生徒が多く見られる。

開校以来、毎朝二十分間の「朝自習」の時間を設けてきたが、教師がつけられない時間帯であることから、意欲や能力に個人差の出やすいプリントによる課題学習には問題点も多かった。そこで、朝のスタートを落ち着いたものにし、読書に親しむ生徒を育てたいというねらいから、一昨年より「朝読書」への移行を試みている。次第に分厚い本を手取る生徒や休み時間にも本を読む生徒が見られるように

なってきた。

長文を読むことやそれに対する自分の考えを文章で書いたり話したりすることに慣れていない生徒たちに力をつけさせるため、「心のきずなをとらえる」という平和に関する単元を用い、発展学習において各々が読んだ本を様々な形でプレゼンテーションするという読書発表会の形態で授業を試みることにした。学習効果をより高めるため、指導者側で作品を選定し、その内容にあつたテーマを設けた上でプレゼンテーションの内容や方法を考えさせることにした。また、班編成（二〜五人の班を十二）も生徒個々の国語力および個性、特技、興味関心などを考慮して指導者側で行い、それぞれに適していると考えられる作品を割り当てた。

二、単元について

単元 「心のきずなをとらえる」

（平成十一年度版 光村図書「国語2」より）

教材 「字のないはがき」 向田邦子

「わたしを作ったもの」 ロバート・ウェストロー

「五月の雉」 蔵原伸二郎

対象 鹿児島市立伊敷台中学校 二年二組 三十六名

その他、指導者側で用意した教材は以下の通りである。

『生しめんかな』 栗原貞子

(岩崎書店「戦争と人間」)

『木琴』

金井 直
(平成十一年度版光村図書「国語Ⅰ」)

『君死にたまふことなかれ』 与謝野晶子

(小峰書店「せんそう・へいわ」)

『ふたりのイーダ』 松谷みよ子

(日本図書センター「戦争と平和」子ども文学館⑩)

『火垂るの墓』 野坂昭如 (新潮文庫)

『一つの花』 今西祐行

(日本図書センター「戦争と平和」子ども文学館②)

『最後の授業』 ドーデ (ポプラ社文庫)

『つるのとぶ日』 大野充子

(日本図書センター「戦争と平和」子ども文学館⑯)

『風が吹くとき』 レイモンド・ブルックス

(あすなろ書房)

『青いオウムと痩せた男の子の話』 野坂昭如

(中央文庫「戦争童話集」)

本単元は、第二次世界大戦中を生き抜いた家族のきずなを描く「字のないはがき」、戦争により心の奥に傷を負った祖父と「わたし」の心の交流を描いた「わたしを作ったもの」、豊かな表現で平和な自然の情景を描きつつ、それを脅かす人間の存在をほめかした詩「五月の雉」という三つの教材から構成されている。一日遠足や修学旅行を通して平和に関する学習してきた生徒にとって、家族を基盤とする平和な生活を脅かす戦争というものの恐ろしさを描いたこれらの文学作品は、興味関心を喚起する教材となりえるだろう。それが、単なる過ぎてしまった悲惨な歴史への興味関心に終わらぬよう、過酷な状況下で生き抜いた人々の姿に触れ、社会の変動に対応して生きる自分、家族の中の一員として生きる自分という二つの視点を踏まえ、自分の生き方を追求する姿勢を身につけさせたい。

単元の導入教材である「字のないはがき」の学習を終えた後で、残りの二教材を含む複数の作品を読んでその感想を発表しあう活動を行うこととする。ねらいとしては読書指導に重点を置いた言語活動を行わせることにあり、学習の効果があがるよう教師側で編成した十二のグループで活動を行う。作品はすべて戦争と平和に関するものを選んだが、生徒の感想が安易な戦争批判に終わらないよう、テー

マを設定して自己の存在に照らしながら感想をまとめていくよう促した。

《テーマ例》

- ・人と人との関わりとはどのようなものか。
- ・戦争によって失われてしまうものとは何か。
- ・主人公は激しい戦争のさなかどのように生きていたのか。
- ・「真実に生きる人間の心」を戦争中に生きた人物の生き方を通して見つめる。
- ・戦争は人々の生活にどのような影響を与えたのだろうか。

・戦争によって人々の心はどのように変わったか。

三、授業の実際（『字のないはがき』学習後）

第一時

学習目標と学習の流れを確認。

教師が「字のないはがき」のプレゼンテーション例を見せる。

班ごとに担当の作品を読み、初発の感想を書く。

↓ワークシート（あらすじ、感想、特に紹介したい内容）

第二時

感想をもとに班ごとで発表内容の重点と、それにふさわしいプレゼンテーションの形態を決定。

第三時

役割を分担し、発表原稿、発表に使う道具の作成。
↓ワークシート（発表の流れと原稿、担当者、使用する物）

第四時

発表の練習

第五時

班ごとに発表し、学習後の感想をまとめる。
↓ワークシート（各班への感想、質問）

（目標に照らした項目を設けた感想用紙）

四、読書発表会を通して

1、第三時で、発表原稿を書かせるにあたって用いたワークシートには、以下の通り発表の流れを指定した。

- ① テーマと作品の紹介
- ② 題名について
- ③ あらすじ説明
- ④ あらすじのまとめ
（途中まであらすじを話し、問いかける形などで終わる）
- ⑤ 感想（テーマに沿って）
- ⑥ 自分たちはこれからどのように生きていきたいのか。

2、発表原稿例（生徒作成）

私達は、「真実に生きるとはどういうことか主人公の生き方から考える」というテーマで、「つるのとぶ日」という作品について発表します。つるのとぶ日と聞いてみなさんはどんな事を考えますか。本来飛べるツルなのに、「とぶ日」という言葉にはどのような意味があるのでしょうか。

登場人物に、かずえという「つるの会」に入っている女の子がいます。つるの会とはそれは、戦争で命を落としたり人たちのために送られてきたつるを焼いて、亡くなった方たちの心に届くように、平和を祈るために作られた会なのです。また、さだ子という女の子の死から生まれた会です。

かずえのお母さんは、つるの会をやめたほうがいいと進め、本人も「やつても意味がない」「何のためにするのか」と考えるようになりました。

いつものように掃除をしていたかずえがそこに建ててあるさだ子の像を見ました。さだ子の像というのは大きなつるを両手に持つて、立つています。戦争で白血病になつてしまつたけど最後まで自分の病気が治ることを祈つて鶴を折り続け、「はだして思いっきりかけてみたい」と言う願ひも叶わないまま亡くなつてしまつた子の像です。（プリントした写真を見せる）かずえはそれを見て、考えるのです。これはさだ子の像の台石に書いてある言葉です（TPシート提示）。この言葉に込められた気持ちは、どういふことなのでしょう。それは、みなさんが実際に読んで確か

めてください。

修学旅行で「原爆資料館」に行つたときに見た平和記念像とさだ子像には、同じ気持ちが込められていると思ひます。また「つるの会」がある意味や、込められている願ひがよくわかりました。「つるを折つた人の心は灰にならないのよ」という一文は、さだ子にも伝わっている気がします。そして私たちが長崎に持つていつたつるも、さだ子さんにも戦争で亡くなった人にも届いたと思ひます。

（千羽鶴を提示して）真実に生きるといふことは、誰もうらまず祈りながらつるを折り続けたさだ子やそのさだ子の思いを守ろうとするつるの会の人たちの生き方にあるような気がします。お話の最後に、折り鶴が「とぶ日」といふ文がありますが、飛べないつるが飛ぶといふことは、きつとみんなの平和を祈る気持ちが届くといふことなのでしょう。世界中の人がひとつの願ひを込めて折つた鶴は、火でも焼けない強いものなのです。みんなの願ひがかなえられる日、このわたしのつるが空を飛ぶのです。そして、わたしたちが同じあやまちを繰り返さないよう平和を守り続けていくとともに、平和について考えていくことも真実に生きることではないでしょうか。

これで私たちの発表を終わります（礼）。

3、発表会後の生徒感想より（それぞれの班に向けて）
・自分たちの朗読を録音していたのはインパクトがあつ

た。声も良くて、悲しい思いが伝わってきた。音楽といつしよにふきこむアイデアも良かった。流しながら何かを行えばもつと良かった。

・戦争によつて失われたものは、平和になつてほしいという妹の願いだ」というところ共感した。

・作者は弟という一つの命を心から尊び戦争に行くことを悲しんでいる。戦争に行くことを名譽と考えていた人々の中にも必ずこのような悲しみがあつたことだろう。

・私も「まじめにしないと」とたまに思うけど、つい守れなくなる。「最後の授業」で、後悔した主人公の気持ちわかる。

・戦争で被害を受けたのは、決して日本だけではないのだなと思つた。祖国の文化や言葉捨ててるなんて、考えたくない。日本の文化をいつまでも大事にして、誇れるようにしたい。

・一つ一つの折鶴は私達がただ何気なく折つていたものだけど、この話を通してその一つ一つにこそ意味があると思つた。「つるのとぶ日」とは、世界に平和がおとずれたときだと思つた。

・守らなくてはいけないもの、決して失つてはいけないものを教えてくれたさだ子さん。十二歳という生命がこの世からなくなつてしまったことを、わたしはむだにしているいけないと思う。

・どんなことがあつても一日一日を強く生きることとはとて

も大切だ。

・戦争について私達は知らないことが多い。これからずつと私達が平和に生きていくためには、「戦争があつた」という事実を目をそむけずに生きていつたらいと思つた。

4、考察

生徒の読む力、興味関心等に応じた作品を与えたため、どの班でもある程度自分たちの力で発表原稿を書くことができたが、発表会に至るまでには、十二の班すべてにおいて数回にわたる推敲や実際の発表の練習を必要とした。実践後に生徒の書いた発表原稿を見直してみると、それでもなおたどたどしい文章表現やひどいクセ字が見られる。日ごろのノート、日記における指導をおろそかにしてはならないと感じる。

発表後の感想には、それぞれの班の発表の良い点を的確にほめているもの、主題に迫る感想を書いているものが多数あつたが、やはり個人差が大きく、内容的に優れたものを書ける生徒は数名に決まってくる。それらを無記名でプリントにし、鑑賞眼を養う一助となればと思ひ、特に良いものに線を引いて配布した。

以下は、学習後の生徒反省の一部である。

班ごとに違う作品を読む学習についてどうでしたか。

・本を一人で全部読むよりも、読書発表会のようにいろいろな方法で発表したほうがみんなで考えることもできるしわかりやすい。また、深くいろいろなことに目を向けて考えることができたと思う。

・班ごとに違う作品を読むことでいろんな作品のいいところを知ることができると思う。それぞれ班の人たちの個性が出ていて、発表方法もいろいろあつておもしろかった。

・クラスの人、一人一人の感じ方などが違うから、それぞれの考えがわかつてよかった。

・ものすごくほかの班の発表に興味があつたし、自分たちが考えながらやつていくのも楽しかった。

・読書だけだと分かりにくいことも多いけど、いろいろな考え方を発表していたから分かりやすかった。

・本の嫌いなわたしにとつてはとていい機会で、たくさん班に分けたことによつてたくさん話の話を聞け、たくさん本を読む気になつた。

・最近あまり本を読むことがなく、久しぶりに本を読んだ気がした。楽しかった。

テーマがあることでどう違いましたか。

・最後に作品の主題が考えられるのでもいいと思う。

・一つのテーマについてその作品を深く考えることができたと思う。普段本を読んで気づかないところにも気づけた。テーマがなくて難しいことを考えるよりもテーマがあつたほうが考えやすいし、しつかりした結論が出せる。

・テーマがなければ何をどうやつて調べればいいのかわからないし、いつまでもつまづいていたと思う。

・感想を書きやすかった。

・調べることがわかつてるので原点がずれない。

・見方を変えて読むことができる。

・そのテーマについて考えることで、今の自分の生き方などを見つめなおすことができた。

・テーマによつて自分たちの観点が変わったと思う。自分たちは一方的な目だけで見ていた。

学習の前と後でどのように考えが変わりましたか。

①戦争と平和について

・戦争は、私たちと関わりがあるんだなと思った。

・戦争は命や食べ物を奪うだけでなく、夢や希望、人のきずな間でも奪うということがわかつた。

・戦争は命だけではなく、生き延びた人の心、体をむしばんでいく。

・修学旅行に持っていった鶴は、ただ適当に、何も思わずに折つた。でも、今回の発表のために、一羽の鶴を思い

をこめて、平和を祈って折ったことによつて、自分の中の何かが変わったし、平和につながるような気がした。

・今の世界情勢を見て、戦争はしかたがなと思つてはいたけど、罪のない人まで巻き込む殺し合いはやはりいけないだと思つた。

・今、自分は平和な立場にいるから、テロ事件の被害者のことなど考えていなかったけど、これからはほかの人の気持ちもよく考えて生きていきたいと思つた。

・戦争に関する写真集や漫画を見て「気持ち悪い」と言う人がいるが、これは現実にあつたことなので、私たちはこのことをしつかり受け止めていかなければと思つた。

②読書について

・小さいころから読書は大好きだったが、中学生になつてからあまり読まなくなつた。だけど、今回大好きな松谷みよ子さんの作品が読めて本当にうれしかつた。

・もつともつとこんな学習をして、本を読んでいかなないと!と思つた。戦争の話、もつと読みたい!

・大嫌いだったけど、まあまあ嫌い、ぐらいになつた。

・あまり好きではなかつたけど、「読んでみたい」と思うようになった。

・担当するのが詩だつたので、最初見たとき少しホッとした。

・今まで冒険ものしか読んでいなかったけど、ジャンルを広げていろいろなことを学ぼうと思うようになった。

・本は、読んでみないとおもしろいか、おもしろくないか

分らないのに、つまらないと勝手に決めつけていた。でもこの発表会を通して、いろんな話に興味を持つた。

・読書はみんなに感動を与えるものだと思つた。

③自分の生き方について

・人と人との関係を考えてことによつて、自分の身の回りにいる人を大切にしなければならぬと感じた。これからは、自分の生き方に誇りをもてるようになりたい。

・戦争のない平和な今を大切に過ごし、戦争で苦しんでいる人のことを胸に留めておこうと思つた。

・ぼくは戦争のない世の中をつくりていきたい。

・親孝行をどんどんしたいと思つた。

・自分は今までとても失礼な生き方をしていたのかもしれない。これからは気をつけたい。

・ただぼんやりと過ごしていた毎日がどんなに幸せで恵まれているか分かり、この一日を一生懸命悔いのないように向き生きていきたいと思つた。

五、反省と今後の課題

(一) 目標に対する反省

「長文を読み、それに対する自分の考えを文章で書いたり話したりする力をつける。」について

生徒達は、自分たちのグループだけに割り当てられた作

品だという意識から、作品への愛着を持つていったようであつた。長文を読むことへの抵抗は予想したほどでもなく、第一時から静かに読みふける様子が見られた。学習前のアンケートから予想された「読書嫌い」は、今まで読書経験に乏しかつたため「好きではない」と答えた結果なのではないかという印象を受けた。一人一人の発達段階や個性に即して、適当な難易度の、内容的に優れた作品を読ませることが読書に目を向けさせる第一歩であると再認識した。

表現活動については、初発の感想、発表形態の検討、発表原稿の作成、発表の練習、そして本番という流れをつくり、特に発表原稿の流れを統一したことにより、比較的スムーズに行えたようである。しかしそれゆえに型にはまつた表現に陥りがちでもあり、型通りの発表原稿を読むだけに終わったグループも見られた。しかし、TPシートをはじめ、自作の朗読テープ、人形劇、あらすじ紹介のためのビデオ制作、インターネット資料の活用、小道具の利用（例・千羽鶴）など発表形態を工夫したグループも多く、機会を与えることで発揮される生徒の表現力の豊かさに驚いた。生徒の実態と学習の過程に応じて、発表の「型」やテーマを限定しない表現活動にまで発展させていきたいと思う。

「戦争と平和に関する文学作品に触れ、平和の尊さについて考えるとともに、自分の在り方生き方に目を向

けさせ、様々な状況の中で人間としていかに生きるかということを考えながら、よりよく生きようとする心を育てる」について

修学旅行などを通して、平和の尊さについて考える機会は今までも持つてきた生徒たちであるが、昨今の揺れ動く世界情勢の中で、戦争も「仕方ない」という感覚や、自分たちが攻撃されるわけではないという危機感の欠如が見られた。しかし、これらの文学作品に触れることにより、「戦争は命や物だけでなく人の心を奪うものだ」「人間のきずなは戦争によつて無残に引き裂かれてしまう」「戦争は夢や希望も奪うものなのだ」など、改めて戦争の悲惨さを知り、平和がいかに尊いものであるかという実感を新たにしようである。学習後の感想でも「平和な今を一日一日大事に生きたい」「周囲の人への感謝の心を忘れないようにしたい」「平和な世界をつくるために自分にできることを考えたい」など、自分の生き方に照らして考えることができるということがうかがえた。

その他の目標について

通読し、大まかなあらすじ、情景や心情をとらえ、それを発表することはすべてのグループで達成できていたが、発表原稿の作成はあくまでリーダーを中心としたものであ

り、必ずしも班員全員の協力のもと行われたものではない。また、テーマを指導者側で設定したことにより、課題を発見する力の育成には至らなかった。事前に推敲を重ね、時間をかけて発表形態にも工夫を凝らすことができたため、表現しようとする内容にふさわしい語句を選び、効果的に表現するという点では達成できたが、中には人前で堂々と意見を述べることに對してまだ抵抗を捨てきれない生徒も見られた。

(2) その他

教材については、図書室にある本をはじめとして、様々な教科書に採択されている作品、私の記憶にある作品、大型書店などを頼りに集めたが、より優れた作品と出会うために、今後とも幅広い教材発掘に努めたい。

班編成については、生徒一人一人の様々な国語力（聞く、話す、書く、読む）を把握し、バランスよく行う必要がある。担任を持つているクラスであったため、一人一人の個性や得意分野、興味関心なども視野に入れて編成することができたが、担当の全クラスにおいてベストな班編成を行うのは困難である。また、授業時間だけでは準備が足りず、休み時間や放課後も利用したり、様々な機器、道具を利用したりと、班ごとの要望をかなえるためにはかなりの時間と労力を費やした。また、活動の過程においては班長への負担過重であった。資料係、道具係など班員にも一人一役

を持たせる工夫をした。

今回のような大がかりな取り組みを毎回行うことは難しいが、例えば平和に関する単元の発展学習として、図書室にある平和に関する書籍を数十冊ピックアップし、ジャンルごとに分けて設置し、その中から自由に選んで読ませ、紹介文を書かせるという学習などで、工夫を続けている。他の単元でも指導内容を精選し、班活動や表現活動を取り入れ、より充実した学習が行われるよう努めていきたい。また、忙しい生活の中で本を読む機会に恵まれない生徒たちに、授業の中で、折に触れ本の紹介をし、読書の良さを教えていくことも国語教師の務めであると感じた。

生徒の感想には、この学習の楽しさ、充実感、達成感を表すものが多かったが、指導者としては、実践前に目標とした力をどれほどつけることができ、それが生徒たちの中にどのように蓄積していったのかという点では反省点も多い。聞く、話す、書く、読む力すべてが問われる学習であり、生徒、教師ともに負担が大きく、継続の難しい取り組みに終わるよりは、ご指摘いただいた通り指導の重点をしぼることも必要であろうと思われる。また、私自身、発表者となった時に緊張のあまり、的確かつ豊かな表現をするということの難しさを痛感した。いただいたご指導、ご助言を参考にしながら今後とも研鑽に努めていきたい。

（鹿児島市立伊敷台中学校）